

## 平成29年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

平成30年3月30日

報告者	学科名	造形デザイン学科	職名	講師	氏名	風早 由佳
研究課題	総社市英語特区における幼・小接続のための授業研究と英語指導者支援					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	風早 由佳	デザイン学部・講師	英語教育・文学	研究統括	
	分担者	津高 千絵美 本行 一江 内田 義宏 福田 正宏 岩中 貴裕 西村 美保	維新幼稚園・教諭 山田幼稚園・教諭 新本幼稚園・園長 総社市公民館・館長 山口学芸大・准教授 岡山大学・助教	幼児教育 幼児教育 幼児教育 地域貢献 英語教育 植物生理学	インタビュー・評価、記録 インタビュー・評価、記録 幼・少連携 広報 接続カリキュラム検討 フレーズ集 編集	
研究実績の概要	<p>本研究では、昨年度に引き続き、平成27年度から総社市英語特区園（維新幼稚園・山田幼稚園）と協働で作成、実施してきた評価表とそれに基づく結果を整理し、引き続き園児の英語学習の評価、データ収集を行った。</p> <p>英語特区幼稚園で3年間の英語レッスンを受けて卒園し、英語特区小学校に入学した卒園児、及び、教師に対するアンケート調査のための調査票の作成、及び英語特区小学校（維新小学校）でのアンケート（1～6年生対象）を実施した。</p> <p>アンケート調査を通して、1年生から3年生までの児童の半数以上が幼稚園と小学校で英語のレッスンは大きく変わった、と回答している。その内、ほぼ全員が幼稚園の英語はたのしかった、ALTの先生と関わるのは楽しかった、と回答している一方で、英語特区出身1年生児童の約半数が、小学校の英語に対して、英語はむずかしいと思う、きらい、楽しくない、といった消極的な回答をしている。こうした回答の原因は幼児教育が目指す遊びを通じた情操教育とコミュニケーション能力の育成と、小学校での学習環境とのギャップに一因があると考えられる。特区幼稚園では園での日々の生活の中で英語に自然に親しむことに重点が置かれ、ALTとの遊びの中で学んだフレーズは、園外の生活の場でも使用される機会が多い。一方で、英語使用が教科の時間内に限定されがちな小学校では、教室英語が増加する半面、日常の生活で繰り返される動作や会話についての英語表現の学習量は減少傾向にある。幼稚園での日常の中で繰り返しながら習得していく学習スタイルから、小学校では教室内での学習へと変化したことにより、耳にする語彙・表現自体も変化していることも子どもたちの英語への抵抗感を高めている一つの要因と考えられる。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>小学校1年生クラスでの教員の英語の発話も指示文が増加し、ひとりひとりとの対話は減少傾向にある。そこで、幼稚園から小学校への学習環境の変化への対応策の一つとして、幼稚園での学習トピック順序の入れ替え、数か月ごとに難易度を変えながら同じトピックに年間数回触れるスパイラル方式を取り入れることで、小学校での学習单元へとスムーズに接続されるよう新たなカリキュラムを提案した。こうした問題は、現在盛んに議論され、積極的に導入されている CLIL に取り組む際にも注意すべき点であることが指摘できる。英語特区園、英語特区小学校へのスムーズな接続のために、小学校1年生のアンケート結果から明らかになった効果的な教材についても今後さらなる調査研究が必要である。</p> <p>さらに、本研究では、幼稚園での英語教育、小学校での英語教育に関わる英語を専門としない指導者に向けた英語教材開発のための調査、資料収集を行った。平成28年度に取組んだ「総社英語特区 英語フレーズ集1」に続き、「フレーズ集2」として、CLIL に取り組む指導者のための理科に特化したフレーズのリストアップに着手した。小学校での理科学習内容を考慮しながら、自然豊かな英語特区園生活で触れる植物や生き物に関する語彙や簡単な実験で使う英語フレーズリストを作成した。</p> <p>また、維新幼稚園、山田幼稚園の英語特区園児が普段の英語学習の成果を測るとともに、慣れ親しんだ園を離れて英語を使用する場を提供するために、ネイティブ講師を招いた英語活動イベントを実施した。9月実施時の内容を2月実施時にテストした結果、理科実験をしながら学んだ語彙、フレーズは5か月経過後も4, 5歳全員が覚えていることがわかった。本研究の成果を平成30年度小学校英語教育学会において発表、投稿する予定である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>なし</p>